

柏崎日本語教室の活動について

Activities of Japanese Language Classes in Kashiwazaki

佐藤 尚子・菅谷 奈津恵

Naoko SATO・Natsue SUGAYA

要旨

柏崎日本語教室は1997年に開講され、地域の外国人に対する日本語支援を行ってきた。当初は昼クラスのみであったが、2001年には夜クラスも開設された。当日本語教室は、日本語サポートに加え、日本文化体験の場、心の居場所という役割も担っている。心の居場所としての位置づけは、特に、新潟県中越沖地震において強く意識されることとなった。また、近年大きな課題となっているのが、子どもの参加者への対応である。日常会話などの日本語支援だけでなく、子どもたちが安心できる居場所を作ること、教科学習を支援することが必要となっている。そのためにも、学校や地域で子どもを支援する者同士が連携をとっていくことが重要であると思われる。

【キーワード】 地域日本語教室、ボランティア、年少者日本語教育、就学児童支援、新潟県中越沖地震

1. はじめに

柏崎市には自動車部品メーカー、建設業、菓子製造会社などの企業があり、研修生として外国人¹を受け入れている。この他にも、小学校、中学校のALT（Assistant Language Teacher、外国語指導助手）、民間英語塾の外国人教師、日本人男性と結婚した外国人女性、その女性と一緒に来た子ども、宗教伝道師などが市内に住んでいる。

こうした中で、外国人が気軽に訪れることができ、市民と交流できるスペースを設けるべく、1997年9月に柏崎日本語教室が開設された²。初めは昼の時間帯だけであったが、柏崎地域国際化協会の事務所移転によって教室が確保できるようになったため、2001年6月には夜のクラスも開講された。2002年までは市の管轄の中で活動してきたが、2003年から、財団法人化された柏崎地域国際化協会の運営に変わり、現在に至っている。

本稿では、これまでの柏崎日本語教室の取り組みを振り返り、今後の方向性を検討していきたい。まず、教室の概要について述べたあと、新潟県中越沖地震での経験と、就学児童支援について報告する。

2. 日本語教室における活動の概要

当日本語教室には、日本語サポートという側面のほかに、日本文化体験の場、心の居場所として

の位置づけがある。以下ではそれぞれについて概略を述べる。

2.1 日本語サポート

2.1.1 参加者の内訳

日本語教室は毎週金曜日に、午後2時から3時半までの昼クラスと、午後7時から8時半までの夜クラスが開講されている。対象は入門者と初級者であるが、本人が教室の意向に納得し希望すれば、中上級者であってもいつでも参加できる。

表1は、2009年の参加者の内訳と、それぞれの平均参加回数を示したものである。昼クラスは日本人配偶者が17人となっており、かつ、平均回数も11.9回と多いことがわかる。全て女性

で、日本人男性と結婚したお嫁さんである。次いで多いのが、ALT等の英語講師7人である。就労者については、人数は4人であるが、平均回数が16.5回となっており、出席率が高い。

夜クラスにおいても、お嫁さん（日本人配偶者）は9人と最も人数が多い。研修生と子どもの参加者は、人数はそれぞれ3人、6人にとどまるが、平均参加数はどちらも19回となっている。その中には、全35回のうち30回、34回出席と、ほとんど休まずに通う参加者も見られた。

表1：2009年の参加者内訳（異なり人数）

| 参加者 \ クラス | 昼（全42回） | | 夜（全35回） | |
|-----------|---------|------|---------|------|
| | 人数 | 平均回数 | 人数 | 平均回数 |
| 就 労 者 | 4 | 16.5 | 2 | 4.5 |
| 研 修 生 | 0 | 0 | 3 | 19.0 |
| 英 語 講 師 | 7 | 10.3 | 1 | 1 |
| 日本人配偶者 | 17 | 11.9 | 9 | 10.0 |
| 子 ど も | 3 | 1.3 | 6 | 19.0 |
| 家族滞在者 | 5 | 8.6 | 0 | 0 |
| 留 学 生 | 2 | 3 | 0 | 0 |
| 短期滞在者 | 2 | 5.5 | 0 | 0 |
| そ の 他 | 5 | 9.4 | 4 | 4.3 |
| 合 計 | 45 | | 25 | |

2.1.2 昼クラスについて

まず、昼クラスの概要を述べる。

昼クラスでは、3人のボランティアを中心に、ニーズ、レベルに合わせ、3つのグループに分かれて学習している。当初はレベルによりグループ分けをしていたが、それだけではうまくいかないことが早い段階でわかった。それは、生活に困らない程度日本語がわかればいいという参加者と、基礎から学んで将来日本語能力試験合格を目指したいという参加者では、取り組む姿勢が違うことである。また、学習習慣が身についているかどうかということも影響してくることがわかった。

1グループは、ゼロ初級者を対象としている。ひらがな、カタカナの読み書きから始まり、あいさつ、生活用語を導入しながら、簡単な会話ができるようになることを目標としている。このグループではひらがな習得が単調にならないよう、絵カード、文字カードを使っている。また、学習に変化をつけるため、絵の多い教材を使って簡単な日常会話を取り入れている。

2グループは、会話が少しでき、ひらがな、カタカナも読める人、あるいは、在日期間が長くても音と文字がなかなか一致しない人などを対象にしている。「読む、書く、聞く、話す」という四技能の向上を目指す。ここでは主教材の他に、副教材として漢字を楽しく学べるものや、擬態語擬音語を取り入れている。また、かるたやパズルを使って興味を持たせたり、参加者に日本人を配偶者に持つお嫁さんが多いことから、料理のレシピを教材にしたりなど、日本文化を取り入れ楽しく学べるよう工夫している。さらに、宿題を希望する参加者には漢字プリントを渡したり、日記を書

いてくる参加者には添削も行ったりしている。

3 グループは、母国で日本語学習歴のある人や、ALT、英語塾講師など、現在語学に携わっている人、日本語能力試験合格を目指している人などを対象としてレベルアップを図っている。ただ、ニーズは同じでも、参加者の力に差がある場合が多い。そこで、初級後半向けの教材を使いながら、参加者のレベルに合わせて指示内容を変えている。力のある参加者には応用力を養うために、慣用表現も取り入れている。時には意見発表を行い、刺激しあいながら発話力も身につける。

2.1.3 夜クラスについて

次に、夜クラスの活動を紹介する。

昼クラスが通年開講であるのに対し、夜クラスは、冬の1月、2月は休みとしている。これは、柏崎は雪国であり、かなり厳しい天候が続くためである。道路状態が悪くなり、交通手段である自転車に乗れなくなることも多い。

夜クラスはニーズやレベルのグループ分けをせず、日本語ボランティアリーダーを中心に参加型の学習体制をとっている。その理由として、まず、参加者の顔ぶれが毎回異なることがある。残業などで毎回来られない人や、仕事で疲れて休みがちになる人も多い。また、子どもから大人まで年齢層が幅広いこともあって、学習目的も様々である。とりあえず仕事のために会話だけできるようになりたいという人や、読み書きもしっかり学びたいという人、日本語能力試験合格を目指したいという人もいる。こうした状況には、学習したことを一つ一つ積み上げていく形式の学習方法は適さないと思われる。そこで、ペアワークやグループワークで日本語能力差をカバーしたり、発表したりすることにより、個人に合った学習ができるようにしている。社会的背景も多様なため、参加者同士が交流しながら、楽しく学習できるよう心がけている。

夜クラスに子どもが参加するようになったきっかけは、日本人を配偶者に持つお嫁さんが、母国に置いてきた子どもを呼び寄せたことにある。日本の学校に入れるまで、我が子に少しでも日本語を身につけさせたいという思いから、一緒に連れて来るようになった。すると、同じようなケースの人や、知り合いの子どもというように広がり、毎回数人の子どもたちが来るようになった。子どもがクラスに入ることによってどのような影響があるかということを、危惧していなかった。というより、他に手立てがなかったため、流れに任せたという感じであった。しかし、子どもが加わると教室が和むという効果があった。子どもを大人たちがとてもかわいがり、話しかけたりした。その後、2人、3人と子どもが増えると、子ども同士のコミュニケーションが成り立ち、よい関係になっていった。子どももまた、お互いよい意味での競争心も芽生えたようである。

子どもは夜通うのは大変だから、土曜、日曜の昼間に開講したらどうかと検討したが、住居が点在しており、子ども一人では来られない。送迎ができないなどの理由から、夜、お母さんと一緒に来て、一緒に学習する、あるいは家族に送ってもらい学習するという状況が続いてきた。2003年から現在まで、子どもの参加は途絶えたことがない。当講座のような地域の日本語教室で、大人と子どもが一つのクラスで学習するというのは、珍しいことのようなのである。こうした子どもの参加者への対応については、大きな課題となっており、4章で詳しく述べたい。

2.1.4 経済危機による影響

2009年には受講者に変化が見られた。昼のクラスでは、男性の就労者を含め参加者が急に増えた時期があった。中には来日して、数ヶ月から1年以上経っている人もいた。そのせいか、今までのように漠然と日本語を勉強したいというのではなく、目標もしっかりしている参加者が目立った。こうした変化は日本経済の悪化に伴うものであり、就労に対しての危機感の表れであろうと思われる。

夜クラスも、2年くらい前から少し変化が現れ始めた。子どもと一緒に来ていたお母さんも、少し話せるようになると仕事に就くようになり、子どもだけを送って自分は参加しないようになった。日本語能力試験を受けたいのでそれに向けた学習をしたいという要望もあった。また、以前参加したことのある参加者が、会社で日本語の向上を求められたため、もう一度文法から学びたいと再度参加するようになった。仕事のために自動車運転免許を取得したいから漢字を勉強したいなどと、参加者の目的意識も高まってきた。そこで、学習体制を見直し、学習前半はみんなで一緒に取り組めるものを行い、後半はそれぞれ学習したいことに合わせた教材を使うことにした。必然的に子どもは別の教材で学習することになった。

2.2 日本文化体験

2.2.1 教室での開催

昼クラス、夜クラスとも、活動には開講当初から季節ごとの行事を取り入れてきた。書初め、節分、ひな祭り、七夕など、日本文化を学ぶことにより、早く地域社会に慣れ親しむことができるのではないかと思ったからだ。

日本文化体験を通して日本語を学ぶこともできる。例えば、書初めではお手本の言葉の意味の説明をし、参加者が好きな言葉を選んで書く。漢字圏でない参加者にとって筆で漢字を書くことは大変であるが、心地よい挑戦でもあるようだ。出来上がった文字を見て笑顔を見せる。もっと漢字を書きたいと意欲が湧いてくる。

ひな祭りでは折り紙を使って雛人形を折る。折り紙を実際に折りながら、「半分に折る」「ひらく」などの用語が導入できる。ひな祭りの歌を歌うことにより、日本の歌を1つ覚えたという満足感も得られる。

七夕では願い事をなんとか日本語で書きたいと、みな真剣に辞書を使う。普段の学習とは違った日本語学習は、参加者にとってもボランティアにとっても、楽しいひと時である。

2.2.2 多文化理解講座への参加

日本語教室として行っている活動の他に、柏崎地域国際化協会主催の多文化理解講座にも積極的に参加してきた。「茶道体験」「日本の踊り」「日本のお弁当づくり」「スポーツ交流会」など、日本人と一緒に交流しながら文化を学んでいる。

参加者からの「こんなことをやってみたい」などの意見、要望を反映し、実現した企画もある。「日本のお弁当づくり」は、教室に来ていた小学生がふと漏らした言葉がきっかけとなった。「わたしはお弁当を持っていく日が一番嫌い」というので理由を聞いたところ、「クラスのみんなのお弁当はみんなきれいなのに、わたしのお母さんは日本のお弁当を知らないからきれいじゃない」とい

う答えだった。そこで、協会に話を持っていき、お母さんと一緒に参加できる「日本のお弁当づくり」が実現したのである。

他にも、語学講座の交流会にも参加している。これは、柏崎地域国際化協会が開講している英語や中国語、コリア語などの講座の受講生が、日頃の学習成果を発表するというものである。日本語教室参加者は、教室で練習した日本の歌や詩を披露し、日本人との交流を深めている。

2.3 心の居場所

日本語教室のもう一つの位置づけが、「心の居場所」である。

注目したいことは、夜クラス子どもたちは、あまり休まずに来ていることである。これは表1の平均参加回数を見るとよくわかる。子どもたちには、「この教室に来たら、自分と同じ境遇の仲間に出会える」「自分は一人ではない」という安堵感があるのかもしれない。この教室が心の居場所となっているのだろう。それは大人も同じだと思う。ある参加者に「かなり日本語が上手だからここでは簡単すぎてつまらないでしょう。無理に来なくてもいいですよ」と言ったところ、「楽しいから来る」と答えた。色々な国の人と話ができて、一緒に勉強するのは楽しいらしい。

こうした位置づけは、新潟県中越沖地震でさらに強く意識されることとなった。それは、参加者にとって単なる勉強の場所としてではなく、心の居場所として重要な役割を占めていることがわかったからである。次章では、震災時の経験について、述べたい。

3. 震災時の支援

3.1 中越沖地震直後の様子

2007年7月16日午前10時13分、新潟県中越沖を震源とするマグニチュード6.8の地震が発生した。柏崎市では震度6強の強い揺れが観測され、大きな被害を受けた。地震後1週間経ってもライフラインの復旧が進まず、道路状況も悪く、混乱が続いていた。教室を開いていた場所が避難所になっていたため、日本語教室は当分の間閉鎖せざるを得なかった。筆者らは、教室に来ていたみんなはどうしているだろうと心配していた。そのとき、偶然スーパーで教室に来ていた子どもに会い、「どうして日本語教室はないの」と聞かれた。当然こんな状況では無理と考えていたのでビックリした。また、別の子どもにも会ったところ、「今週教室はないの？」とがっかりした表情を見せた。日本語教室が、生活の中心的部分に位置づけられていることを感じた。そこで、日本語教室はしばらくできないことを、みんなに連絡したほうがよいと思った。みんなが無事元気であるか確認したいという思いもあった。日本語教室参加者で顔を合わせることができたらと考え、電話連絡をすることにした。まず、集まれる安全な場所を確保しなくてはならない。無理をしないで来られる人、子どもは保護者と一緒になど、安全を第一に考えた。

地震発生から約2週間後の8月3日午後2時、昼クラスと夜クラス合わせて15人が集まった。中には、3人の子どももいた。なによりもみんなが笑顔で会えたことが、私たちボランティアとしてもうれしかった。同じ仲間に出会うことができたという安心感も、参加者から感じられた。地震発生時にどこにいてどんな様子だったかを、一人ずつ話してもらった。まだ来日して間もない参加者にとっては日本語で話すことは難しいことだったが、一生懸命伝えようとし、聞いている人たち

も「そう、そう。すごかったね」などと言葉をかけていた。同じ体験をしているからこそ言いたいことや気持ちがよく理解できたようだ。話をすることで恐怖を共有しあえたことは、精神的にも落ち着き、よかったのではないかと思う。「いつから教室始まるの？」と口々に聞かれたが、日本語教室がいつ再開できるかまったく見通しの立たない状況下であったため、「またみんなで勉強できるようになったら連絡するから、それまで元気でね。」と答えるしかなかった。しかし、みんなの表情は暗くはなかった。普段は20分で来るところを、みんなに会いたいからという理由で、悪路を1時間以上かけて来た人もいた。ずっと顔を見せていなかったお母さんも、子供と一緒に来た。教室参加者のほとんどの人が集まったことから、心のつながりの強さを感じた。日本語教室としての役割の重要性をあらためて認識した。

3.2 中越沖地震後の教室活動

震災の経験を踏まえ、いくつかの取り組みを行った。まず、日本語教室の授業内容に、防災知識を加えることにした。「避難」「警報」「被災」など防災用語は普段使われない言葉が多いので、定着しにくい。毎回少しずつ繰り返すことにより、防災の意識を持ってもらうよう心がけた。新潟県が発行した『地震のときにあなたと家族を守る』のパンフレットや、柏崎市が発行した『柏崎防災ハンドブック』を使い、わかりやすく無理のないように心がけ取り組んでいる。

また、新潟産業大学と柏崎地域国際化協会の共同で、体験記『あの時、あの瞬間』を出すことになった。この体験を文章に残すことは、防災に役立てるためにもとても意義のあることだと思い、日本語教室に来ている人たちにも書くことを勧めた。今まで作文の学習は特にしていなかったので初めての挑戦であった。自分たちの書いたものが後に来日し、生活していく人たちへのメッセージとなり防災につながっていくとの思いがあった。また、母語と日本語の両方を掲載するということで意欲も湧き、完成することができた。体験記を手にした時は、皆の喜びと同時に、達成感からくる自信のようなものを感じた。

4. 就学児童支援

2章でも触れたように、外国人児童への支援は当教室でも重要な課題となっている。以下では、柏崎市による就学児童の支援状況と、柏崎日本語教室での取り組みについて報告する。

4.1 背景

正確な人数は把握できていないが、柏崎市内の小中学校には、外国人児童が点在している。その背景には前述のように、日本人を配偶者に持つお嫁さんが、母国に置いてきた子どもを呼び寄せたことがある。1999年には、市の教育委員会から柏崎地域国際化協会に、日本語を母語としない就学児童に対する日本語支援のボランティア要請があった。次いで翌年にも要請があり、筆者も市内2校で「取り出し授業」を担当した。取り出し授業というのは、日本語学習が必要な子どもを在籍学級から取り出して支援を行う形態のものである。その頃はまだ、どの時点まで取り出し授業を行うかといったことは、決まっていなかったようである。柏崎地域国際化協会に直接家族からの要望があり、夏休みを利用して集中指導を行った時期もあった。

現在は、児童一人につき、50時間の取り出し授業を受けることができるそうだ。当日本語教室に来ている子どもたちのほとんどがその対象となっており、各々の学校で取り出し授業を受けている。そのため、その授業内容との兼ね合いをみながら日本語教室での学習項目を決めている。

4.2 外国人児童生徒のための夏休み宿題サポート

筆者らが手探りで就学児童支援を行っている中、2009年6月に新潟大学の「学習支援サークル」より、交流の呼びかけがあった。このサークルは新潟市内で、日本語が母語でない小中学生を対象に、算数や社会などの教科学習をサポートする活動を行っているという。「活動の一環として、他地域の子どもたちとも仲良く交流したいと考えているのだが、柏崎ではどうか」という打診が来た。そこで、早速、柏崎地域国際化協会と相談をし、今までは日本語指導だけしかできなかったのでいい機会であり、かつ、大学生がどんな形で子どもたちと向き合っていくのかということも今後の支援の参考になるのではないかと考え、計画を進めた。

学習支援サークルとの共同企画は、2009年の8月22日、23日に「外国人児童生徒のための夏休み宿題サポート」という形で実現した。参加者は日本語教室の夜クラスに来ている子どもたちだけでなく、幅広く声かけをした。小学生のころ日本語教室に来ていた中学生にも声をかけたところ、友だちも連れてくると言ってくれそうだった。

2日間という短い期間であるため、子どもたちとの距離を事前に縮めておいたほうがいだろうと提案があり、当日までに2回ほどの手紙のやりとりをした。最初に大学生側から一人一人に手紙を出してもらい、子どもたちが返事を書いた。大学生側には子どもたちの年齢、性別、国籍を事前に知らせておいたので、受け取る子どもたちに配慮することができた。中国から来日したばかりで、まだひらがなも読めない子どもには、中国語でやりとりをしてもらった。子どもたちにとっては、手紙を日本語で書くのは初めてのことだったが、悩みながらも真剣に取り組んでいた。

宿題サポート当日は、22日に8人、23日に7人の子どもたちが参加した。サークルの通常の活動では1対1が基本なのだそうだが、参加した子どもたちのほうが多かったため、グループに分かれてそれぞれの課題に取り組んだ。宿題の絵を持ってきた子どもや、理科の自由課題をやりたいからと近くの公園に大学生と出かける子どもなど様々であった。小学生は集中できる時間が短いので、ゲームを取り入れたりしていた。中学生は大学生と談笑しながら宿題をしていた。初めての取り組みで不安もあったが、子どもたちの素直さ、熱心さに大学生がうまく応えてくれた。初めは緊張していた子どもたちの表情が、生き生きとしたものになっていったことにホッとした。中学生の男の子は「お兄さんがいい」と言って、自分から男子大学生の隣に席を移動していた。これも年齢の近い若いお兄さんという親近感からくるものではないかと思う。

特に目を見張ったのは、来日したばかりで母語でもなかなか声を出さず、顔も下を向きがちだった小学生の様子である。表情が明るくなり、算数をやらせるとしっかりできるということがわかった。じっくり向き合って、日本語以外の勉強も一緒にやってみたこと、一緒に食事をしたり、ゲームをしたりしたこと、相手が男子学生だったことなどが彼の緊張を解き、笑顔につながっていったのではないかと思う。

この夏の企画は2日間という短期間のものであり、もともと宿題を終わらせること自体が目的ではない。一緒に話したり、遊んだりすることによってコミュニケーションがとれ、次につながって

いくだろうと考えての取り組みだった。そういう意味でも、この企画は大きな成果となった。

この2日間で改めて思ったことは、子どもたちの日本語支援は大人とは違い、学校の勉強もサポートしていかななくてはいけないということだ。つまり、日本語支援と教科学習支援の両方が必要なのだ。それには、小学校高学年、中学生には、理科や数学を教える若い力も大切だということを強く感じた。そして、今回の企画をこのまま体験だけで終わらせたくない、なんとか日本語教室の夜クラスでもこのような状態が作れないものかと考えるきっかけとなった。そこで、新潟産業大学の日本語教育担当者に打診し、大学生のボランティアを募集してもらった。留学生2人と日本人学生1人が来てくれることになった。

4.3 現在の状況

2009年10月から、新潟産業大学の学生ボランティアに、子どもたちの学習支援をしてもらうことになった。現在の参加者は、小学生3人、中学生3人で、すべて中国出身である。小学生にはボランティアの学生に一人ずつ付いてもらい、宿題をしたい子どもには先に宿題をやらせ、次に用意した課題をやる。中学生は自分でやりたい学校の教科をやり、わからないところをボランティアの学生に聞く。また、日本語を勉強したいときには能力に合わせたプリント問題をやる。最後の20分くらいで小学生、中学生一緒にゲーム教材を使った日本語の学習をする。

時には漢字圏ではない大人の参加者に子どもが漢字の読み方を教えたり、一緒に問題を考えたり、自由にやらせている。これは大人と同じ教室内で学習している利点だ。また、教室も広いため、お互い妨げにならず適度な刺激になっている。つい最近も女子中学生が日本語能力試験の問題をしていたインドネシア人を見て、初めてこうした試験のあることを知り、難易度を聞いていた。自分も挑戦したいと思ったようだ。会話の苦手な大人も中学生には話しかけやすいようだ。漢字圏ではないため、わからない漢字を盛んに聞いていた。中学生も教えてあげられることに満足感を得ているように見える。このように母語が違うので必然的に日本語で会話しなければならない状況も、自然な日本語習得に効果的だ。

活動してきた中で気づいた点がいくつかある。第一に、母親が子どもについていたいという場合は、うまくいかないということだ。子どもは絶えず母親に頼り、母親も必要以上に口を挟んで手伝ってしまう。このケースはいつまでも教室になじめず、他の子どもとも交わらない。これでは楽しく日本語習得ができないと考え、母親には教室の外で待ってもらうようにした。すると子ども同士言葉は通じないものの、別の形でコミュニケーションをし始めた。そして、次第に笑顔もみられるようになった。

第二に、子どもが継続して教室に通うためには、保護者の協力が不可欠ということだ。夜、仕事から帰った後、食事を済ませ、子どもを送るということは大人にとってかなり大変だ。やはり、車で20分ほどかけて来ていた子どもは、いつの間にか来なくなってしまった。今現在来ている子どもたちは、徒歩可能圏内、もしくは車で10分足らずという近距離の子どもたちだ。

第三に、子どもたちがストレスを抱えているということだ。ある子どもはいつも教室に入って来るなり、「先生、あのさあ、あの、えーと…」と言って何か話をしたが。学校での楽しかったことを伝えたいようだ。学校のことを、友だちのことをなんとか日本語で伝えようとすることは、日本語の運用力も上がるからいい。さらに、もっと大切なことは、子どもの話が終わるまでじっくり

聞いてやることによって心が満たされることだ。また、ある子どもは教室に入ると必ず抱きついてくる。帰る時も同じように抱きつく。そんな様子を見て思うことは、子どもたちは何かさびしさを感じているのだろうかということである。だからこそ、日本語の勉強を楽しい時間にしたいし、日本語を学ぶことが苦痛になってはいけないと思う。子どもたちの精神的サポートという点でも、この日本語教室の役割は大きい。

5. おわりに

本稿では、十数年にわたる柏崎日本語教室の活動実践について報告を行った。当教室の役割として、日本語サポート、日本文化体験の場、心の居場所という3つの点から述べてきた。心の居場所としての役割は、新潟県中越沖地震での被災経験において強く意識されることとなった。そして、近年、課題となっているのが子どもの参加者への対応である。

子どもに対する学習支援の必要性は、なかなか理解されにくいのが現状だ。なんとか意思疎通ができていると、日本語学習の必要性を見逃してしまうケースが多い。生活言語能力（BICS: Basic Interpersonal Communicative Skills）と学習言語能力（CALP: Cognitive Academic Language Proficiency）の習得には、時間かなりの差があるとされている（Cummins 1980）。生活言語能力の習得は数ヶ月から1年だが、学習言語能力の習得には5年から9年かかるという。生活言語能力の習得だけでは授業についていくのは難しい。実際教室に来ている子どもたちを見ていると、習得している語彙の少なさに驚く。現時点では子どもたちに取り出し授業の学習内容を聞き、重複しないよう角度を変えて、指導している。そうすることにより、語彙数がもっと増やせるのではないかと思う。

母語保持の重要性も見過ごされやすい。自己表現ができる言語を持つことは不可欠であり、そのためには母語を伸ばし、確立していかなければならない。以前、日本語教室に小学校入学前の子供を連れてきたお母さんに「どうやって日本語を勉強させたらいいか」と聞かれたことがある。その子どもは不安そうな表情をし、緊張して教室に来ていたので、「まず、家ではなるべく母語で話したほうがいいですよ」と言ったところ、そのお母さんはとてもびっくりしていた。周囲からは家でもなるべく日本語を使ったほうがいいと言われていたようだ。日本語習得に一生懸命になって感情表現できる言葉を失ってしまわぬよう母語保持の大切さを知ってもらいたいと思う。

さらに、ここで重要なのは支援者同士の連携であろう。筆者は偶然にも、取り出し授業の指導員2人に会う機会があるため、ある程度の情報を得ることができる。だが、その機会も不定期であるし、時間もわずかである。また、残念ながら、他の指導員の状況については、把握できていない。子どもたちの学校での様子や、取り出し授業の内容を把握しておくことは、支援方法を考える上で重要である。支援者同士が定期的に情報交換をし、連携していくネットワークが形成できればと願っている。

謝辞：本稿の執筆にあたり、上越教育大学の原瑞穂先生、(財)柏崎地域国際化協会・事務局長の清水由美子様から貴重なご助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。

注

1. 本稿では便宜的に、外国にルーツのある人々を「外国人」と表現している。しかし、その国籍は必ずしも外国とは限らず、日本の国籍を取得している人もいる。また、外国籍であっても日本で生まれ育っている人もいる。
2. 本稿の第一著者は、1997年の開設当初から、ボランティアリーダーとして日本語教室の活動に取り組んでいる。

引用文献

柏崎地域国際化協会・新潟産業大学国際センター編（2008）『あのとき、あの瞬間！ 柏崎在住外国人による中越沖地震体験記』

Cummins (1980) The cross-lingual dimensions of language proficiency: Implications for bilingual education and the optimal age issue, *TESOL Quarterly*, 14, 175-187.